

秦豊吉の近代化意識と舞踊観について

早稲田大学大学院生

日本学術振興会特別研究員 國崎 彩

研究目的および研究方法

本発表は、日本近代舞踊史研究として、文学者／演劇プロデューサーであった秦豊吉(1892-1956)が1935(昭和10)年に創設し、主に戦前まで関わった日劇ダンシング・チーム(以下NDTとする)を対象とし、NDTの活動にみられる秦の近代化意識と舞踊観について考察するものである。文献資料・上演資料等、一次資料の調査収集・整理(特に秦豊吉の広範な雑誌執筆記事の調査収集・整理)に基づき、考察をおこなう。

考察

秦は学生時代、『早稲田文學』『三田文學』『我等』『新思潮』等、当時非常に影響力を持った文学雑誌において、近代劇戯曲の翻訳や評論、舞台評などを旺盛に執筆している¹。帝大卒業後、三菱の社員として1920(大正9)年より1926(大正15)年までベルリンに赴任し、様々な演劇・舞踊を観、また現地の文化人に面会し、これらを著書や雑誌への寄稿により日本に紹介した²。帰国後は、ゲーテやマルクの翻訳出版を行う一方、「丸木砂土」というペンネームを用い、『新潮』『新青年』『文章倶楽部』等において、西洋の風俗文化の紹介等を行っていた。舞台活動としては、学生時代より西洋劇上演の翻訳に携わることはしばしばあったが、本業としては、1933(昭和8)年の小林一三の東京宝塚劇場に入社し、プロデューサーとなったからである。

秦は舞台活動に携わる以前より、アンナ・パヴロヴァやイサドラ・ダンカンの舞踊論を翻訳するなど舞踊に関する執筆も少なくなく、ドイツ滞在中に発表した「所謂邦劇の海外紹介に反対す」(1924(大正13)年4月『新潮』掲載)では、「三味線を離れ、歌をすててもなほ芸術として、肉体の旋律として鑑賞し得る日本の踊があつたら、初めて之を海外へ紹介するのも好い」と述べていた。秦は、舞踊のみならず、文学、演劇、映画等、様々なジャンルの作品についての評論を書き、一貫して、西洋において理解され評価され得るような日本の芸術・文化を求めていた。

こうした秦の根強い舞台芸術に関する近代化意識は、NDTの企画意図を述べた「大衆娯楽論」³に、次のように現れることとなった。秦は、NDTを「大衆の為に娯楽を提供する」「国民的産業」とし、自身の役割について、「一つの興行団の責任者は一人のプロデューサーとして、常に新しい大衆娯楽的な品種と形式を生む事が、これからの仕事」と

自任し、「芝居音楽舞踊その他の品種に通じてしかもこれを総合して、茲に新しい興行形態を作り出すプロダクション」をしようとした。NDTは当初、「身長五尺以上の女性、脚線美」⁴という身体規格に基づいて集められた女性達により、主にジャズ音楽によるショーを上演していたが、のちバレエ、東洋的な舞踊、日本舞踊、あるいは伊藤道郎振付作品なども上演レパートリーに含み、その積極的に新しい舞踊を取り込む活動は、当時の舞踊評論家にも高く評価され、舞踊紹介の面で大きな役割を果たしたと考えられる。

1940年代になると、時局の影響下、秦の近代化意識は「日本民族舞踊」という形で具現することとなる。これは、「露西亞古典舞踊の技巧と訓練」を基礎とし、NDTの振付家・団員を国内及びアジア各地へ派遣させ取材した民族舞踊、民俗舞踊を、レビュー形式に再構成して上演するというものであり、最終的には、「日本の舞台芸術として外国の劇場に上演され、且つ芸術批評家の研究の対照(ママ)と成り得るもの」として、「日本古典舞踊、雅楽、能、演芸まで包含して集大成」した「日本バレエ」が志された⁵。この活動は国策に沿ったものといえるが、しかし、これ以前・以後の秦の執筆活動からは、時局下において、なおも日本の舞台芸術を「コスモポリタン」⁶なものとしたいとする自発的な活動であったとも捉えられる。秦の仕事の特徴的な点は、まずは欧米型の身体美を舞台上に視覚的な美として作り上げようとした点で、そのためにバレエの「技巧と訓練」が必要とされた点である。秦の、様々な文化的な文脈を持つ舞踊を上演し、「肉体の旋律として」西欧の観客も「鑑賞し得る」、「コスモポリタン」な舞踊団創造の試みは、当時の日本の舞踊界において独自性を持つ活動として、興味深い。

(付記)本研究は平成18年度日本学術振興会科学研究奨励費による助成を受けている。

¹ 拙稿「明治・大正期の秦豊吉研究—舞台芸術における身体への関心」(『演劇映像』第46号,2005年)参照。

² 拙稿「1920年代(1920-1926)ベルリンにおける秦豊吉(1892-1956)」(『演劇研究センター紀要』VI,2006年)参照。

³ 秦豊吉「大衆娯楽論」(1936(昭和11)年6月『文藝春秋』掲載)

⁴ 1935(昭和10)年9月13日『都新聞』朝刊掲載の広告。これはラジオ・シティ・ミュージックホールのガールズの身体規格にならったものであった。

⁵ 佐谷功・編『日本民族舞踊の研究』(1943,東寶書店)序文,秦豊吉「日本民族舞踊の研究」について」2-5頁

⁶ 「谷謙次論」(1929(昭和4)年8月『中央公論』掲載)では、秦は「テキサス無宿」の移民文学としての「国際性」を評価する一方、谷を「コスモポリタンではない」「小さき日本的な」思想の部分で批判している。